

ジョン・ミューアとアメリカの国立公園

上岡 克己

(国際社会コミュニケーション学科)

John Muir and National Parks in America

Katsumi KAMIOKA

(Department of International Studies, Faculty of Humanities and Economics)

I. フロンティアの終焉

キャトリンが国立公園を提唱してから40年後、幸運にもイエローストーン国立公園は創設された。しかし一部の知識人や作家・芸術家を除き、アメリカ国民のあいだに国立公園に対する理解があったとはいいがたい。むしろ19世紀半ば、アメリカは「明白な運命」と「無尽蔵の神話」にとりつかれて西漸運動(=環境破壊)を続けていたのであった。その結果、フロンティアの通過した地域は有刺鉄線が張り巡らされ、私有地として囲い込まれていた。西漸運動の自然環境に対する貪欲さと責任感の欠如がアメリカの国土を大きく変容させたのである。

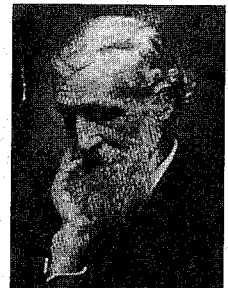
ところが南北戦争後から19世紀末にかけて、さしもの広大な処女地も徐々に狭くなり、1890年フロンティアの終焉が宣言された。フロンティアの終焉は文明が自然に勝利したことを意味するが、それは同時に自然の征服者である人間の側に微妙な意識の変化を生じさせた。この意識の変化は特に都市住民にあいだに広がっていたように思われる。なぜなら彼らは自らつくり上げた文明社会がけっして理想的な社会ではなく、むしろ混乱と腐敗に満ちていたことを悟ったからである。このことは失った自然の意味を問い直す契機になったと考えられる。また一方でわずかに残されていたウィルダネスがヨーロッパにはないアメリカ独自のものであることが認識されるにつれて、これらを保護していこうという機運が高まってきた。

19世紀以後半、これらの動きをひとつにまとめて引っ張っていく、理念と行動力のあるヒーローの登場を時代は必要としていた。その人物こそジョン・ミューア、アメリカの国立公園の父と称される男である。彼の一生は自然保護運動と国立公園創設に捧げられたと言っても過言ではない。

II. 若きジョン・ミューア——人生の転機

1849年、11歳のミューアは父親に連れられてスコットランドからアメリカに移住した。ミューアの父はアメリカというエデンの園で、キリスト教会の原点に返ろうという信念に駆られて移住を決意したのであった。波乱に富んだミューアの人生最初の転機となった。

ニューヨークに着いた彼ら一行が、どのようにして新天地のウィスコンシンへ向かったかを調べてみると、当時の開拓者の西部ルートの一見が見えてくる。彼らはハドソン川をさかのぼり、オルバニーからエリー運河を



ジョン・ミューア

通って当時の中西部の入口であるバッファローへ向かった。ここからミシガン湖を渡り、ミルウォーキーに達してさらに西へと進み、ウィスコンシン州（当時は準州）の中央部の荒地に居を定めた。

19世紀半ば、フロンティアはミズリー川あたりまで到達していたので、ミュアー一家が定住した地は厳密にはフロンティアとはいえないが、いまだにウィルダネスの様相を呈していた。



ミュアー湖

第二の転機は、1861年23歳をすぎて大学進学に目覚め、地元のウィスコンシン大学に入学したことである。たいした教育を受けていない彼が入学できたのは、彼の熱意のほかにも多くの新生を受け入れざるをえない大学側の財政状況があったようだ。ともかく入学した後は、教授陣のおほえもめでたく、化学・地質学のカー教授の知遇をえている。また彼の妻ジーンはミュアーの才能を見抜き、後に後見役として彼を世に紹介することになる。

ちょうど南北戦争の最中に入学したミュアーは、戦争の負傷者を見るにつけ医学を目指したこともあった。しかし極度の貧困と徴兵への不安から体調を崩してしまう。彼は徴兵を拒否して自由の国カナダのウィルダネスに救いを求めた。「私はウィスコンシン大学を去り、ウィルダネス大学に入った」(Muir 142)。ここから彼の冒険人生が始まった。幼いころから鳥類学者のウィルソンやオーデュボンの旅行記を読み漁り、フンボルトやマンゴ・パークのような冒険家にあこがれていたもので、カナダへの逃亡は自らの夢の実現でもあったと考えられる。

南北戦争が終わると、ミュアーはアメリカにもどった。発明の才能をかわれてインディアナポリスの工場で働いていたとき事故にあい、失明しかかった。この事故は彼に啓示を与えた——後悔しない生き方を邁進しよう。1867年彼はインディアナポリスからフロリダまでの1000マイルの徒歩旅行に旅立つことを決意した。これこそ「ひとりの男の奇妙なアメリカ再発見の旅の始まり」(Turner 131)ということになる。6カ月後アメリカ南部を縦断したミュアーはキューバにいて、南アメリカ行きの船を待っていた。「アマゾン的大河を河口まで筏か小船で下る」(155)ことが彼の夢であった。しかし南アメリカ行きの船はなく、フロリダで雇ったマラリヤで体力を消耗したこともあり、行き先をカリフォルニアに変えた。インディアナポリスで負傷したとき、病床で見たヨセミテの美しい景観がこの時よみがえってきたのである。この決断が彼の人生を変え、アメリカの将来を決定づけた。

1868年カリフォルニアに着いたミュアーは翌年の夏、羊飼いとして雇われ、初めてヨセミテ溪谷に足を踏み入れた。羊飼いの仕事は古来からいわれているように、パストラルの自然を楽しむと同時に生活の糧をうるうってつけの仕事である。もっとも羊がヨセミテの自然の最大の破壊者であることを知った後は、牧畜産業にたいして懐疑的となった。後年ヨセミテの印象を次のように語っている——「生きている限り滝や鳥や風が歌うのを聞いていよう。岩が言わんとするところ、洪水や嵐、なだれの言葉を学ぼう。氷河や野生の庭園に親しみ、できるだけ世界の原点に近づこう」(Guide 9)。

エマソンとの出会い

ウィスコンシン大学からカリフォルニア大学へ夫の転勤とともに移ってきたジーン・カーは、ここでもミュアーの相談相手となった。ミュアーは東部に知人の多い彼女に頼まれてヨセミテを旅するガイド役をつとめた。

ヨセミテを訪れる著名人のなかにエマソンがいた。ウィスコンシン時代、ジーンから直接エマソ

ンやソローの著書を紹介されて、彼らの超越的思想に自己と重なるものを見出していた。エマソンは彼にとって師の存在であったが、初対面であろうとなかろうと彼は臆することなく自らの想いを彼にぶつけていった。エマソンはミューアの一途な性格に若かりしソローの面影を重ねあわせたかもしれない。風貌など全く気にせず、何かにつかれたかのような好奇心の強い男。ボストンに帰った後、ミューアにお礼の手紙を書いた。「なくてはならぬ人がなくてはならぬ場所にいる、山のテントの中に君を見出して私はうれしかった。孤独と雪の中での君の見習い期間と隠遁生活が終わりを迎えたと守護神が告げ、君が豊かな実りを待ち受けている社会に還元することを心から祈っている」(Turner 215-16)。

ミューアはできればソローと同じく、自然の只中でだれに邪魔されることなく無邪気な子供のように生きることを望んでいたであろう。しかしエマソンが期待したように、時代が彼を必要としていた。ヨセミテに精通した彼は19世紀末の自然保護運動の胎動のなかに巻き込まれ、もはや後戻りすることはできなかったのである。

シエラ研究

ヨセミテはいかにして造られたか——初めてのエッセイ

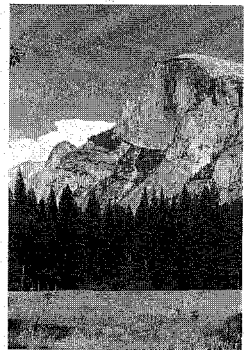
ハーフドームに典型的に見られるように、花崗岩が垂直に聳え立つあのヨセミテ独特の風景はどのようにしてできたのだろうか。当時カリフォルニア地質調査局長で全米でも有数の科学者のひとりジョシア・ホイットニーは、一貫して地盤の陥没説を唱えていた。

一方羊飼いの仕事を終えた後もヨセミテにとどまっていたミューアは、地元のホテルに雇われ、ガイド、雑用係、家畜の世話をしながら暇を見つけてはシエラネバダ山脈のすみずみまで探索していた。いまやシエラの山々、動植物に精通していて、ヨセミテが氷河によって造られた根拠を見つけ出していた。

シエラ研究の第一人者ホイットニーと全くの無名の羊飼いのガイド、ホテル従業員のミューアとの論争。普通ならとりあってもくれないものだが、ミューアの精緻なシエラ研究が思わぬ結果を生むことになった。

1871年9月ヨセミテを訪れ、ミューアから氷河を案内されたマサチューセッツ工科大学学長のランクルは、ミューアに『ニューヨーク・トリビューン』紙を紹介し、ヨセミテの氷河について書くようにとすすめた。

これがミューアの最初のエッセイで、1871年12月5日「ヨセミテの氷河」(“Yosemite Glaciers”)として掲載された。彼はこの中でヨセミテ渓谷が氷河によって造られたことを実証し、ホイットニー説を退けた。ミューアの説は多くの人々に歓迎された。ホイットニーといえば、6年前にオムステッドのヨセミテ州立公園管理・運営に関するレポートを握りつぶしたひとりと考えられているが、今回その偽善性があらためて白日の下にさらされたのであった。ミューアのエッセイはアメリカの雄大な景観を広く全国に知らしめる役割をも果たしている。



ヨセミテ国立公園

初めての自然保護論

ミューアは自らのエッセイが好評を博したことで執筆に自信をもった。ジーンに促されて山を下り、オークランドに移った。ここの『オーバーランド・マンズリー』誌にシエラ研究をまとめて発表することになったのである。都会の生活はけっしてなじめるものではなかったが、山のことを文章にするのは楽しかった。都市生活をおくりながら同時に気が向けば原生自然へ出かけるというラ

イフスタイルは、彼の性格にあったようだ。

1876年2月、初めての自然保護論「神の原初の寺院：森をどのようにして保存すべきか」(“God’s First Temples: How Shall We Preserve Our Forests”)を發表。ブライアントの詩「森の賛歌」の最初の言葉をタイトルに使用したのは、その詩の中にこめられた聖なる森のイメージを読者に喚起させたかったのであろう。彼は現在おかれているカリフォルニアの危機的な森林の状況を語り、政府の森林政策の変更を訴えた。「荒廃と破壊が驚くべき割合で生じており、保護対策を早急に実施しなければ、数年以内にこの最も高貴な森林の種はほんの少ししか残らないであろう。森林の最大の敵は、火災と斧である」(Muir 631)。

静かな生活——果樹園経営

文明と自然を気ままに往復するという生活を繰り返していたミュアも、40歳を過ぎると心境に変化が生じていた。1880年初めてのアラスカ旅行から帰ると、以前ジーンによって紹介されていた女性ルーイ・ワンダ・スツレンチェルと結婚し、彼女の父親が経営するサンフランシスコ郊外の約10平方キロの果樹園(現在のジョン・ミュア国立史跡地)を手伝うことを決意した。結婚後まもなく身重の妻を残して再度アラスカに渡り、愛犬スティキーンとの冒険旅行を試みたのはいかにもミュアらしい生き方であった(この冒険旅行は後年『スティキーン』(Stickeen)として發表され、ミュアの最もよく知られる作品となった。)果樹園経営という慣れない仕事ではあったが、樹木は以前から好きであったし、その上二人の娘にも恵まれ、楽しい家庭生活はなにひとつ不自由ないように思われた。

Ⅲ. ヨセミテ国立公園：アメリカの自然保護運動の始まり

このような静かな生活を破ったのは、1889年5月『センチュリー・マガジン』の編集者ジョンソンがミュアを訪れた時であった。ミュアに案内されてヨセミテ渓谷に入ったジョンソンは、その惨憺たる状況をまのあたりにして、ヨセミテ渓谷周辺の地域を国立公園にすることをすすめた。

実際のところ、州立公園に指定されているヨセミテ渓谷でさえ維持・管理をつかさどる委員会が機能しておらず、侵入者は絶えなかった。小屋、フェンス、伐採された倒木が無造作に残されていた。しかしもっと憂慮すべきことが、公園の周囲にある森林地や草地で起こっていた。ここでは「ひづめのあるイナゴ(hoofed locusts)」(Runte 60)とミュアが語る羊の群れが、あたりの自然を食い荒らしていたのだった。二人はこの荒廃を目撃して、早急な保護の必要性を痛感したのである。

ヨセミテ国立公園創設のために二人は立ち上がった。ジョンソンは議会でロビー活動を開始し、ミュアは『センチュリー・マガジン』に公園の必要性を訴える文を書いた。發表された「新しいヨセミテ国立公園の特徴」(“Features of the Proposed Yosemite National Park”)の中に、ミュアの危機感がよく表れている——「国民の使用とレクリエーションのために公有地からとっておくこと……もしそうしなかったり、保護されなかったりすれば、全地域は遅かれ早かれ樵や羊業者たちによって破壊され、もちろん楽しみとしての使用にも向かなくなるであろう……斧、鋤、豚、馬が長い間ヨセミテの庭園と森の中を徘徊している。近づきやすく、壊れやすいものはすべてというまに破壊される。これこそ政府の特別の保護下におかれる唯一の理由である」(699-700)。

国立公園として早急に保護すべきという彼の訴えは、『センチュリー・マガジン』の20万の読者の目にとまり、ちょうど提出されていたヨセミテ法通過の後押しをすることになった。一方ジョンソンは人脈をいかして政界や産業界にはたらきかけていた。イエローストーン国立公園成立の際にノー

ザン・パシフィック鉄道の役割が大きかったように、今回もサザン・パシフィック鉄道の支持をとりつけたことが公園成立の重要な要因となった。さらに驚くべきことに、鉄道会社の後押しがあった公園は予定の5倍の広さ（約4000平方キロ）に拡大されたことだった。これには源流域の保護を訴えた下流の農業従事者の支持も大きかった。

それにしてもこのような広さの公有地の移管を木材業界、鉱山業界、牧畜業界はなぜやすやすと認めたのであろうか。これには法案にからくりがあったと思われる。実はヨセミテ法は「森林保護区」(reserved forest land)という名称で提出されていた。法案が通過しやすいように「国立公園推進派が意図的に変えた」(Jones 45)のかもしれない。さらに国会議員が新しい公園を有名なヨセミテ渓谷と混同して、賛成票を投じたのかもしれない。また数日前セコイア国立公園が成立していたこともヨセミテ法案には好都合であった。名称はともかく実質的に国立公園としてヨセミテはジェネラル・グラント（1940年キングズ・キャニオン国立公園に編入）とともに1890年10月1日に正式に指定された。（国立公園という名称は1905年から使用された）。自然保護運動に基づく記念すべき最初の国立公園の誕生であった。

ヨセミテ州立公園やイエローストーン国立公園は一部の熱心な支持者がロビー活動を通して獲得したもの。今回は一般大衆の支持があった。全国的な自然保護運動がわずかながらも動き始めた。人々の熱意が国立公園造りにあまり熱心でない議会を動かしたのである。

ヨセミテ法

マーセッド川の流域とツーオラムニ川の源流域を含むこの新たな国立公園は、基本的にイエローストーン法と同じく、内務長官の管理下におかれ、その趣旨は公園を自然状態のままで保存すること、動物のむやみな捕獲の禁止、借地権による収入、侵入者には園外追放がうたわれていた。軍が実質的な維持・管理をしていたが、侵入者に対しては単なる追放のみで、厳しい罰則規定がなかったために、「羊飼ひ、密猟者、鉱山探索者たちは、追放されても翌日には再び戻ってくる有様だった」(Ise 59)。

ところで奇妙なことに、ヨセミテ州立公園は今回の国立公園制定には含まれず、問題を残すことになった。ミューアはヨセミテの保護運動を通して、個人よりも自然保護を全体としてとりくむ組織の必要性を痛感した。これが自然保護団体としてのシエラ・クラブの誕生につながっていくのである。

シエラ・クラブ

数々の国立公園を守ってきた輝かしい伝統をもち、現在会員数が50万を越え、アメリカ有数の自然保護・環境保護団体のひとつとなったシエラ・クラブはどのようにして誕生したのであろうか。

アメリカの自然保護団体は最初、登山愛好者や鳥類愛好者グループが集まって生まれた。1863年創立のウィリアムズタウン登山クラブを嚆矢とし、その後アパラチア山岳クラブやオーデュボン協会がつくられ、西部ではロッキー山脈クラブが活動を開始している。

だが国立公園があいついでつくられたカリフォルニアにこそ自然保護団体を最も必要としていた。発案者は『センチュリー・マガジン』の編集者ジョンソンである。1892年5月28日、創設準備に関わった人々が集まって「シエラ・クラブ」を正式に立ち上げた。会長はジョン・ミューア、会員数182名でスタートした。ミューアは策略にたけた人物でないことを自覚していたので、組織の長になることを固辞したが、会員は彼の知名度と妥協を知らない理想主義に期待した。結局ミューア自身も個人としての自然保護運動の限界を悟り、自然保護団体の必要性を考慮して引き受けることになったのである。

会員数の推移

年	会員数
1892	182
1900	384
1910	1256
1920	2257
1930	2537
1940	3500
1950	6772
1955	9972
1960	16066
1965	32815
1970	114336
1975	153004
1980	181773
1988	441376
1995	550000 (概数)

(Guide, 久保)

会員の大半は科学者、大学教授、弁護士で占められ、このなかにはスタンフォード大学学長や州最高裁判事もいて、最初から政治的影響力のある団体となっていた。

シエラ・クラブ創立の趣旨は、三つの基本姿勢、すなわちレクリエーション：「太平洋岸の山々を探検したり楽しむことができるようにするため」、教育活動：「それらに関する性格な情報を提供する」、自然保護活動：「シエラネバダの森や他の重要な自然を保護する際に、国民と政府の支持と協力を求める」(Cohen 9)からなる。

会員相互の情報交換の場として会報 (*Sierra Club Bulletin*) が1893年から発行され、親睦を深めるためのハイキングも1901年から始まった。このように非営利の草の根民主主義団体として定着していったが、まもなくシエラ・クラブとしての真価を問われる出来事が次々と起こり始めるのであった。

IV. 自然保護運動の分裂

アメリカの森林

19世紀後半東部と中西部の森林の大半が伐採されると、木材業界は西部へ目を向け始めた。無秩序な伐採に対して連邦政府もいくつかの法を整備したものの、解決にはむすびづかなかった。そんななかで1891年に制定された「森林保護区法」(*Forest Reserve Act*)

は、無秩序な公有地売却の方針を改め、公有地内の森林を売却対象から除外するもので、「自然保護史上最も重要な政策」(Ise 48)と呼ばれている。

「森林保護区法」によれば、「合衆国大統領は、州、準州にかかわらず、また商業的利益の有無にかかわらず、森林を有する公有地を公共の保護区としてとっておき、保護することができる。大統領はそのような保護区の制定と境界を布告により宣言できる」(48)。この法を施行して、ハリソン、クリーブランド、マッキンリー、ローズベルトの各大統領が70万平方キロの森林保護区(1907年以降は国有林と名称が変更された)を指定した。とりわけローズベルト大統領は60万平方キロという膨大な森林保護区を指定している。

ミューアは「アメリカの森林」(*"The American Forest"* 1897)の冒頭で、「アメリカの森林は人間に多少損なわれてしまったが、神にとって最大の喜びであったにちがいない。なぜなら神が創ったもののなかで最高のものであったからである」(Muir 701)と語り始め、当時の自然保護の動きとしての「セントラルパークの創設、4つの国立公園、そして30の森林保護区の指定」を高く評価している。しかしながら都市公園は別にして、本来景観や森林の保護を目的としてつくられた国立公園と、森林の保護と活用を目的とする森林保護区(国有林)ではそもそも存在理由が異なっていた。そして両者間の齟齬がまもなく表面化し、不幸にもアメリカの自然保護運動は完全に分裂するにいたったのである。

自然保護運動の分裂 — ミューアとピンショ —

当時の自然保護派の代表的人物であったミューアとて、森林のもつ商業的価値を否定するものではなかった。しかし1897年に制定された「森林管理法」(*Forest Management Act*)により、森林保護区内での鉱山開発や放牧が許可されることを知るにおよび、森林保護区への危機感を募らせ、そ

れらを国立公園へ移管させようとつとめた。1901年彼はこれまでの論文をまとめて『アメリカの国立公園』（*Our National Parks*）を出版した。アメリカの国立公園に関する最初の書である。

一方自然開発派の代表はギフォード・ピンショである。1905年農務省に森林局が設置されると、初代局長に就任した。彼の森林政策は一貫して実利主義的なものである。彼は森林の商業的価値を高く評価し、森林保護区の開発さえ容認する政策をとった。「森林政策の目的は、美とか野生とか野生動物の維持とかの理由で森林を保護するべきではなく、人間の繁栄のために、一定の材木供給を維持するためであり、他の考え方に優先されるものである」（Turner 323）。

20世紀初頭、自然保護の運動は、ウィルダネスを理想とする自然の全面的な保護を訴える派と、自然を保護しながらも人間生活の向上のためには開発しなくてはならないと考える派とに真っ二つに分かれてしまった。従来自然保護には conservation という用語が使用されていたが、ピンショ率いる森林局は賢明な開発、すなわち自然資源の有効活用という実利的な意味をこめてこの言葉を使うようになったので、ミューアたちはありのままの自然の保護という意味こめて preservation（自然保存）という語を使うようになった。

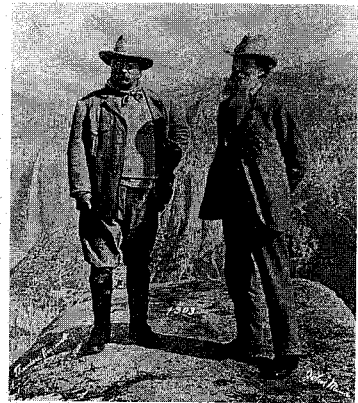
セオドア・ローズベルトの苦悩

1901年マッキンリー大統領が暗殺された後、副大統領のローズベルトが急遽26代大統領に就任した。若いころからハンター、登山家、ナチュラリストとして自然に親しんでいたので他のいかなる大統領よりも自然を理解していた。実際のところ、60万平方キロの森林保護区を指定し、1906年には「古物保存法」を制定し、大統領布告により自由に国立記念物公園（National Monument）をつくることできるようにした。この法は国立公園史上最も重要な法律とみなされている。このように彼は20世紀初めの自然保護政策に指導的な役割を果たしている。

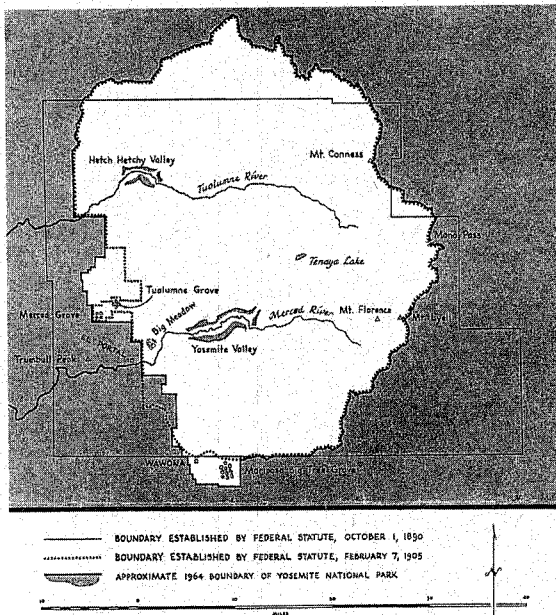
1903年、西部への遊説旅行の途中、彼はミューアを訪ね、ヨセミテでの二人きりのキャンプを楽しんだ。大統領が民間人と二人きりでキャンプを楽しむということ自体前代未聞のことであろう。最初大統領訪問の話があったとき、ミューアは迷ったが、彼の影響力は無視することはできず、むしろこの機会を利用して自然保護を訴えることを決意したのであった。ともあれこの一件は、アメリカにおけるミューアの存在感の大きさを示すものでもあった。

大統領はヨセミテの自然を満喫した。そしてキャンプファイアーを囲みながら、アメリカの森林が直面している多くの問題について話し合ったにちがいない。そのなかでも、ヨセミテ国立公園に編入されないまま破壊が進んでいたヨセミテ州立公園の連邦政府への移管がミューアから提案され、大統領は快くその提案を受け入れた。

とはいえ大統領は自然保存派（preservationist）にばかりいい顔をするわけにはいかなかった。彼の政権を支える森林局の意向、とりわけピンショを中心とする自然保全派（conservationist）の開発志向を無視して政策を実行することは事実上不可能である。ここにローズベルトの苦悩があった。その苦悩の最たるものは、彼の政権中に起こったヘッチヘッチー渓谷におけるダム建設問題であった。アメリカの国論を二分する大論争となったが、それにはいる前にヨセミテ国立公園をめぐる二つの出来事にふれておく必要がある。



ローズベルトとミューア



ヨセミテ国立公園の削減

ヨセミテ国立公園の削減

ミューア自身も予想していなかったほどの広大なヨセミテ国立公園の誕生は、自然保存派にとっては最大の勝利といえる。しかしその美酒に酔いしれるまもなく、その広さに関しては各方面から不満が続出した。特に公園の周囲に位置する牧畜・木材・鉱山業界の不満が強く、公園の境界を変更する、つまり公園を削減する法案が提出された。しかしこの時は、創設まもないシエラ・クラブの猛反対にあって計画は頓挫した。だが20世紀になり、連邦政府内に開発派が多数をしめるようになると、開発勢力は再度ヨセミテへの攻撃を開始した。

ヨセミテは森林をはじめとして鉱物、牧草地、河川など豊かな資源を有する地域である。1890年に国立公園に指定されたとき、園内にはすでに多くの人が入り込み、土地の所有権と鉱山の開発権を主張していた。シエラ・ク

ラブ側も240平方キロの私有地の返還には同意していたが、提出された法案によれば、国立公園全体の実に $\frac{1}{3}$ におよぶ1200平方キロの削減案であった。削減地域はシエラ森林保護区に移管されることになったが、これは開発が認められる地域に指定されたことを意味する。なおこの削減の埋め合わせとして、北部地域に250平方キロが付け加えられた。もっともこの地域は標高が高く、「経済的に無価値な地」であったことは言うまでもない。

結果としてヨセミテの雄大な景観は守られたものの、削減対象の地域はほとんどが低地の部分で、生態系からみれば大きな打撃を被ることになってしまった。1906年には鉄道用地として30平方キロが削減され、また一方で150平方キロが加えられた。このように国立公園に指定されていようとも、国立公園が永遠に安泰であるとはかぎらない。国立公園といえども公有地の一つであり、連邦政府の管轄下にある以上、削減も拡大もすべては議会と大統領に委ねられているのである。

ヨセミテ州立公園の編入

1864年ヨセミテ渓谷とマリボザの巨木群が州立公園として保護されるにいたったのは賢明な選択であったといえる。当時はまだ国立公園や森林保護区という概念は熟していなかったからである。しかし1890年にヨセミテ渓谷とマリボザの巨木群の周囲が連邦政府下の国立公園に指定された以上、同じ地域に異なった管理形態が重複するのはいろいろな支障がでてくる。またなによりもこれらの景観がカリフォルニア州民だけのものでないことは誰の目にも明らかであった。

州の維持管理がひどいことを知ったシエラ・クラブ、とりわけミューアは連邦政府下の国立公園に移すのが望ましいと考え、自らロビイストとして州政府にかけあったり、すでに述べたようにローズベルト大統領にも直訴していた。一方州のプライドと利益を優先させたい者にとって州立の方がなにかと都合がよかった。

1890年ヨセミテ国立公園制定の際、ミューアやジョンソンは州の反発を買って国立公園が認められなくなるのを懸念して、表立って移管の主張を控え、時が来るのを待っていた。1905年連邦議会

はヨセミテ渓谷とマリボザの巨木群を国立公園に移管することを決め、州政府も維持費がかさむこともあり、連邦政府に返還することを決め、翌年正式に認めた。議会の対応はヨセミテ国立公園の削減の埋め合わせとも考えられる。ローズベルト政権は開発派と保存派の両方の主張を痛み分けという形で処理したのであった。

V. 国立公園とダム ― ヘッチヘッチー論争

ヨセミテ渓谷の北30キロメートルのところに、ツーオラムニ川が流れ込むヘッチヘッチー渓谷がある。先住民インディアンが「豊かな草地」と呼ぶこの渓谷は、ヨセミテ渓谷と瓜二つの景観を造りだしていた。訪れる人も少なかったので、原初のままの自然が残されていた。ところが皮肉にもこれら二つの要因がこの地の運命を決定づけることになったのである。

1890年ヘッチヘッチー渓谷ははれて国立公園に含まれることになったが、その低地の部分に私有地が残っていた。慢性的な水不足に悩まされ、ダムの必要性に迫られていたサンフランシスコは、この地をダム建設地として虎視眈々と狙っていたのである。1901年サンフランシスコ市長はダム計画を発表。ここにあしかけ13年にも及ぶ論争が開始された。

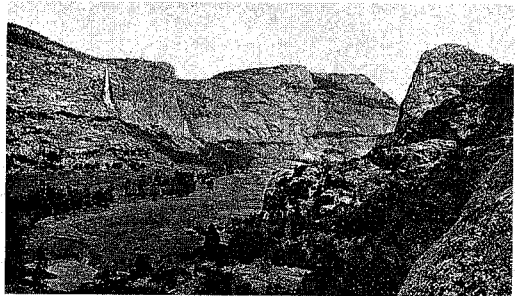
そもそもこの地が選ばれたのは、渓谷というダム建設にはうってつけの立地であるからだ。建設費は他の箇所より安くおさえることができる。唯一の支障は、この地が国立公園の中にあることである。

実はこの年（1901年）、自然保存派が気が付かないうちにある法案が議会を通過していた。その法とは「公有地優先法」（Right of Way Act）。連邦政府の管轄する公有地内に、公共の利益に反しなければ運河、パイプライン、トンネル、水路等を優先的につくる権限を内務長官に与えるというものである。この法によればいくら国立公園内とはいえ、ダムの建設が可能となる。ダム建設派は将来をみすえてこの法案を通していただった。とするとすでに論争の勝負はついていたということになる。

ダム反対派はヨセミテ国立公園設置法に論拠を求めた。ここにはすぐれた景観が自然状態のまま保存されることが明言されている。最終的にヨセミテ国立公園設置法と公有地優先法との整合性をめぐってダム賛成派と反対派のあいだで論戦が闘わされることになった。決定権は内務長官が握っていたが、当然ながら彼一人で決定できるものではなかった。

しばらくの間膠着状態が続いたが、1908年ガーフィールドが内務長官に就任し、ダム建設の手続きを開始したことで、一気に緊張が高まった。自然保存派は3年前に公園の¹/₃を失い、大変な屈辱感を味わっていたが、今回はヨセミテ国立公園を代表するような景観が狙われていたのである。だれしものが聖域への侵略行為とみなした。彼らは全国的な反対キャンペーンを開始した。

反対運動のリーダーはもちろんミューアである。ローズベルト大統領はミューアの主張に理解を示していたが、一方で大統領として国民の多数の声にも耳を傾けなくてはならなかった。ヘッチヘッチー渓谷をあやぶむミューアは直接大統領に手紙を送り、大統領からもすぐに返書を受け取った。大統領はミューアの意向をうけてヘッチヘッチーに代わる代替地を探させたが、これが無理であることがわかったと、カリフォルニア州の問題として介入することをためらった。ミューアは大統領の



ヘッチヘッチー渓谷

決定の背後に狡猾なピンショール森林局長の存在を感じていた。

論争の経過

1906年4月18日、サンフランシスコを襲った地震とそれによる大火がダム建設派に有利にはたっていた。新内務長官ガーフィールドは、サンフランシスコの上水道、周辺部の灌漑用水、電力などの公益性を重視してダム建設を容認した。彼はさらに「ヘッチヘッチー溪谷はたしかに美しいが、似たような景色がヨセミテ溪谷にも見られる。そして貯水池ができることによって、溪谷は稀有な美しさをもった湖にかわるであろう」(Jones 90)と語った。ダム建設派がヘッチヘッチー溪谷にこだわる理由の一つに、単に飲料水の確保にとどまらず、水力発電を通して電力を売却し、建設費用をまかなおうとしたことである。落差の大きい溪谷なら、他の箇所 비해容易に多くの電力が得られるというわけである。

ダム反対派は一貫してヨセミテ国立公園設置法の趣旨を主張し続けた。すぐれた自然の景観は自然状態のまま保存されるべきで、ヘッチヘッチーもその例外ではありえない。ヘッチヘッチー溪谷は以前よりも利用しやすくなっており、多くの人々のレクリエーションの場となりつつある。もしダムが建設されれば、国民のレクリエーションの場は失われてしまう。ヨセミテ国立公園はカリフォルニア州民ためだけのものではなく、国民のものである。

自然保存派もダムの意義は認めている。公園の外なら反対する理由もないのである。だが開発派はあくまでもヘッチヘッチーにこだわった。いよいよヘッチヘッチーに危機が迫ると、妥協案として国立公園内にあるエリナ湖などを代替地として提案した。ミューアをはじめとする自然保存派にとっては苦渋の選択であった。しかしそれでもダム建設派はヘッチヘッチーに固執した。

ダム反対派はマスコミを利用し、また手紙、パンフレットで議員にはたらきかけた。総じて東部の議員が国立公園に同情的であった。ヘッチヘッチー論争は東部と西部の対立という図式も見せ始めた。

文明と自然の相克

そもそも国立公園内にダムを造らねばならなくなったのは、都市の膨張にその原因がある。文明の発展と人口増加は都市を周辺部まで拡大させるとともに、都市の機能をまかなうための資源を郊外の自然に求めざるをえなかった。しかしながらフロンティアの終焉後、自由に処分できる公有地はほとんどなく、資源の多くは国立公園や国有林に存在していたので、これらの場所が狙われることになったのである。今回のヘッチヘッチー溪谷は、まさにアメリカ史上最初の「ウィルダネスと文明の両方の権利争い」(Nash 162)の場といえる。文明(人間の営み)が自然に影響を与えるのはもはや避けることはできない。それをどの程度まで許容できるのか、あるいは拒絶するのかが今回の論争の原点にあったのである。

シエラ・クラブの亀裂

1908年ガーフィールド内務長官のダム建設案は下院公有地委員会で僅差で承認され、下院の審議に委ねられることになった。そのために開催された公聴会で自然保存派は巻き返しに成功し、下院は案の審議を延期せざるをえなかった。

この決定に危機感をいだいたサンフランシスコ側は、世論工作にのりだす。彼らの主張は「ウィルダネスの美はすばらしいものだが、人間の健康、快適さ、人間の生命の方が優先する」(169)ということであった。

意外なことに、ウィルダネスの価値よりも文明の必要性を重視する者が、いわゆる自然保護団体

のなかにも多数いたことである。シエラ・クラブもその例外ではなかった。彼らの主張は「ヘッチヘッチーは多くの人々が近づきたい地であり、貯水池にした方が溪谷美がいつそうます。他の場所も考えられなくはないが、サンフランシスコの過大な財政支出を強いることになるので賢明ではない」(Jones 112)というものである。しかしこの主張はヘッチヘッチー論争に関してシエラ・クラブも一枚岩でなかったことを露呈してしまい、後のダム建設反対運動に禍根を残すことにつながった。

ミュアはシエラ・クラブの会員からこのような意見がでるとは思いもよらず、大いに傷つき、自らのリーダーシップに限界を感じ、会長の辞任と退会をほのめかした。しかし他の会員から慰留されとどまった。結局1909年、別組織の「国立公園保存協会」を立ち上げて闘うことになり、最初から苦戦を強いられた。1910年、シエラ・クラブはヘッチヘッチー論争に関する賛否投票を実施した。その結果は、現状のまま自然を守ることに賛成の票が589票、反対が161票であった。反対を投じた者の多くが会を去っていった。

1910年当時シエラ・クラブの会員数は1000名程度。会員数や資金力の不足が組織の活動のネックとなっていたのは明白である。実際の活動費の大部分をミュアをはじめとする一部の人が出し合っていたのだが、開発派に立ち向かうだけの資金力不足は最後まで運動に影響を与え続けていた。もっともミュアの一貫した反骨精神が多くの人々に感動を与え続けたのは言うまでもない。要はいかにしてダム反対の世論を形成するか的一点にかかっていた。

ミュアはさまざまな機会をとらえて世論に訴えた。「ヨセミテ国立公園に商業が侵入してくることは、遅かれ早かれ全国の公園やレクリエーション地が侵略され破壊されることを意味する。ヘッチヘッチーは明らかにこの典型的なケースである。もし許せば、ヨセミテ国立公園最大の景観の一つを失うことになり、大変危険な先例になりかねない」(Hetch-Hetchy 269)。「ヘッチヘッチーにダムを造るとは！国民の大聖堂や教会を貯水タンクとして水没させるに等しい行為である。というのもいまだかつて神聖な寺院がこれほどまで冒瀆されたことはなかったからである」(Muir 817)。

1909年ローズベルトが退き、タフトが新大統領に就任した。それに呼応して内務長官もガーフィールドからバリンガーに交代した。バリンガーはガーフィールドの認可を凍結し、ヘッチヘッチーに代わる候補地を調査するように指示した。バリンガーの後任のフィッシャー内務長官もこの政策を継承した。事態は膠着状況を呈してきた。

結局1912年11月に公聴会が再開されるまでに2年半を要した。この間自然保存派は不安のまま事態を静観せざるをえなかった。実はこの2年半という期間、建設派はタフト政権では実現の見込みがないと考え、意図的に結論を遅らせる戦略をとっていたのである。このような戦略は自然保存派にとって痛かった。長引けば長引くほど財政が逼迫して、闘う前に「ひあがってしまう」可能性が十分あったからだ。

クライマックス

1912年11月の公聴会は6日間にわたったが、サンフランシスコ側にさらなるデータが要求されるにとどまった。ダム建設に関する最終報告書が陸軍工作隊 (Army Corps of Engineers) によって提出されたのは翌年の2月19日のことである。不幸の始まりは、1909年バリンガーが最終報告書の作成を地質調査局 (Geological Survey) ではなく、陸軍工作隊に依頼したことであった。そもそも「陸軍工作隊とは美しい景観などは考慮せず、もっぱら公共事業として道路やダムの建設に従事する部隊」(Ise 89)なので、最初からダム建設に有利な報告書になることが予想されたからであった。

提出された報告書によれば、ヘッチヘッチー溪谷以外にもダム建設にふさわしい地はあり構造的

にも可能。問題はコストであった。サンフランシスコの提案したプロジェクトはどの候補地よりも2000万ドル安い。したがってヘッチヘッチー溪谷が望ましいというのである (Jones 148-49)。一方この報告書を読んだ保存派は多少の財政的犠牲を払ってもヘッチヘッチーは避けるべきと訴えた。フィシャー内務長官は悩んだ末サンフランシスコ側の主張をしりぞけた。

しかし自然保存派にとってそれは一時の勝利でしかなかった。というのもこの決定の翌月には民主党のウィルソン大統領が就任し、その上こともあろうに新内務長官に任命された人物が、1901年ダム建設を発表したサンフランシスコ市長のもとで法定代理人を務めていたレインだったからである。政権内部の流れははっきりとダム建設容認へと変わっていった。ダム反対派にとって残された希望は議会で否決されること、もしそれが不可能であれば、大統領の拒否権を期待するしかなかった。

その後の公聴会や審議の進展は自然保存派にとってつらいものであった。公聴会場でダム建設賛成派を代表してピンショアが意見を述べた——「すべての自然保護政策の基本的原則は、使うこと、つまりすべての土地やその資源を多くの人々の役に立つようにすることである」(Nash 171)。

ある議員は「自然の美を賞賛し、神の造り給いしものを冒瀆するのはしのびがたいが、二つの意見が衝突した場合、人間の幸福、健康、生命が優先されねばならない」(172)と語る。これらの意見に対してダム反対派が主張する審美性とか精神性は、多くの議員にとってうつろに響いたことであろう。

反対派の希望を打ち砕いたのは、カリフォルニア州選出の下院議員ケントがダム賛成に回ったことであった。序でも述べたように、彼は自らの私有地を「ミューアの森国立記念物公園」(Muir Woods National Monument)として保護し、自然保護に並ならぬ愛情を注いでいるように思えたからである。ところが下院議員に当選すると、その立場は微妙に揺れ動くことになった。今回の論争に関しても、当然のことながらミューアやシエラ・クラブから支援の要請を受けていた。しかし彼はウィルダネスを犠牲にするのは嘆かわしいが、この場合はより多数の利益につながるのでダム建設はやむおえない、また一部の民間企業が電力を独占するのは不公平で、民主主義の原則に反すると結論づけた。

ケントの転向は自然保存派からみれば背信行為に思われた。しかしそれゆえに彼の決断は公有地委員会の流れをダム建設やむなしという決定へ勢いづかせることになったのである。9月3日、下院で採決がおこなわれた。賛成183票、反対43票、棄権203票。法案はすぐに上院に回された。

上院での審議の間、多くの有力紙はダム反対の社説を掲載し、自然保存派も上院議員や大統領に必死の働きかけをおこなったが、上院は水不足に悩んでいるサンフランシスコに同情し、人道的理由からダム建設に賛成していた。12月6日、上院での採決がおこなわれ、賛成43票、反対25票、棄権29票で可決された。最後の望みは大統領の拒否権発動であるが、ウィルソンは1913年12月19日法案に署名して、計画から13年にもわたる長い論争はついに決着をみたのであった。

ヘッチヘッチー論争の教訓

人生の最晩年、最強の敵に立ち向かい敗れてしまったミューアの心境は筆舌に尽くしがたいものがある。しかしヘッチヘッチー溪谷は失ったが、今回の論争はけっして無駄ではなかった。「国民の良心が眠りから目覚めた」(180)とミューアは感じた。実際のところ、ウィルダネスに対する敵対的な姿勢が徐々に変化の兆しを見せ始めていた。以前ダムを造ることは、飲料水や電力を確保し、人間の幸福と健康につながるという建設派の主張があった。ところが今回の論争の過程で、文明のなかにウィルダネスを残しておくことが人間の幸福と健康につながるという主張が現われ、支持をひろげてきたのである。20世紀の初め、自然にたいする価値観は大きく変わろうとしていた。

ヘッチヘッチー論争の意義は結果ではなく過程にあった。論争は自然保護運動を活気づかせた。ミューアは1914年12月24日静かに息を引き取った。ヘッチヘッチー論争を含めて自然保護運動に費やした彼の一生そのものが、後世への遺産として引き継がれることになった。

1925年ダムは完成した。まもなく湖岸や湖面は姿を変え始めた。原始の森と広々とした草地、そこを流れる清らかな小川は水没し、この世から消滅した。ミューアが言うように、人造湖は「美しくも偽りの湖」、「風景の汚点」(Muir 817)として見えた。渓谷よりも美しいというダム建設派の主張は裏切られた。

歴史の必然性と選択の余地

ヘッチヘッチー論争は国立公園といえども永遠に安泰ではありえないことを明らかにした。すでに言及したように、この論争の原点には文明と自然（ウィルダネス）の不可避免的な衝突があったと考えられる。文明が進歩し人口が増加するということは、文明を支える資源を必然的にウィルダネスに依存することになるからである。今回の論争、そしてこの後にも繰り返される国立公園内の資源をめぐる論争も、基本的構図は同一のものである。文明の進歩は非情、もはや後戻りすることはありえない。ただし今回の場合、後戻りはできなくても他に選択の余地はあったのだった。

すなわちヘッチヘッチー渓谷以外にもダム建設の可能な地はほかにもあったのである。ただ費用がかさむこと、そして最大の電力を得たいということからヘッチヘッチーに決定したまでである。「最大多数の最大幸福」というスローガンのもと、効率性や経済性にウィルダネスは屈したといえる。ナッシュは「余分なコストがかかっても他の候補地を見つける努力を怠ったこと」(178)が自然保存派の敗因だと語る。

確かに自然保存派にとって、まだ自然保護という概念が熟していなかったことが最大の敗因であったことは明白である。当時の自然保護運動を引っ張っていたのは、少数の知識人エリートといっても過言ではあるまい。多くの国民はまだ日々の生活におわれていて、自然保護に関わる余裕すらなかった。このような民衆が目覚め、表舞台にでてくるのは、国立公園が大衆化し始める第2次大戦後のことである。

VI. 自然保護団体の課題

国立公園の大衆化

ヘッチヘッチー論争は自然保護団体の今後の取り組みに多くの課題を残した。ダム建設派から繰り返し主張された公益性、最終的にこの公益性でダムは建設されることになったのだが、この公益性とは何だったのだろうか。ダム建設派は受益者の数を問題とした。これによれば、ダム建設によってメリットを受ける人数はサンフランシスコ市をふくめて50万人、一方ヘッチヘッチー渓谷を訪れる人数は年間数千人にすぎなかった。この差は歴然としている。最初から全く勝負にはならなかった。「最大多数の最大幸福」という公益性が優先される以上、自然保存派はこれに対抗できる対策を講じなければならなかった。

その一つに国立公園を大衆に開放し、世論の支持をえようとしたことである。1916年内務省内につくられた国立公園局はツーリズムを推奨し、国立公園の公益性（経済性）を高める政策に大きく転換していった。たしかにこれにより国立公園のシステムは国民から圧倒的な支持をかちえたが、皮肉にもまた別の大きな問題も生じさせることになったのである。

自然保護団体の規模拡大

フォックスによれば、自然保全派と呼ばれる開発派と自然保存派の決定的相違は、自然に対する見方の相違というより仕事との関わり方の相違であるという(Fox 144-45)。政府の部局や民間企業はダム建設が生活の糧となっている。仕事を遂行するための費用は当然保証されている。一方自然保存派は仕事の合間にボランティアとして活動せざるをえない。財政的な基盤の脆弱さが長期の闘いでは必ず露呈してくる。今回の論争から、自然保護団体は規模を拡大し、財政的な基盤を強化する必要性を痛感した。

自然保護政策のバランス

ヘッチヘッチー論争では他の選択肢も考えられたのに結局二者択一ということになってしまった。たしかに今回の論争では経済的要求がウィルダネスの要求にまさったということになったが、アメリカの国立公園史上全体から見れば、自然保存派の敗北は次へのステップとなった。すなわちヘッチヘッチー溪谷を失った代わりに、1916年政府内に国立公園局という独自の部局を手に入れたからである。ダム建設に賛成したレイン内務長官とケント下院議員は、論争後国立公園局の設置に貢献した。一見奇妙な行動に見えるかもしれないが、自然保存派と自然保全派(開発派)との微妙な政治的バランス政策の表れである。政策運営上両極端におれる時があっても、どちらか一方的に有利な政策はありえなかった。かならずその補償が来るべき時になされた。これがアメリカの国立公園政策の特徴である。

しかしながらこのような政治的なバランス政策が時として自然保護運動を複雑化する。バランスを決定するのは世論と、世論と選挙民を意識する議員である。自然保存派は世論形成とロビー活動を重要な戦略にすえねばならなかった。そのような時代はまもなく到来することになる。

Works Cited

- Cohen, Michael P. "A History of the Club's Birth and its Early Wilderness Travels."
The Sierra Club: A Guide. San Francisco: Sierra Club, 1989.
The History of the Sierra Club: 1892-1970. San Francisco: Sierra Club Books, 1988.
 Fox, Stephen. *John Muir and His Legacy: The American Conservation Movement*.
 Boston: Little, Brown and Company, 1981.
 Ise, John. *Our National Park Policy: A Critical History*. Baltimore: Johns Hopkins P, 1961.
 Jones, Holway R. *John Muir and the Sierra Club: The Battle for Yosemite*.
 San Francisco: Sierra Club Books, 1965.
 Muir, John. "The Hetch- Hetchy Valley: A National Question." *American Forestry*
 Vol. XVI (May 1910):263-69.
John Muir: Nature Writing. Ed. William Cronon. New York: Library of America, 1997.
 Nash, Roderick. *Wilderness and the American Mind*. New Haven: Yale UP, 1982.
 Runte, Alfred. *National Parks: The American Experience*. Lincoln: U of Nebraska P, 1997.
 Turner, Frederick. *Rediscovering America: John Muir in His Time and Ours*.
 San Francisco: Sierra Club Books, 1985.
 久保 文明 『現代アメリカ政治と公共利益』 東京大学出版会、1997.

平成13年(2001)10月3日受理

平成13年(2001)12月25日発行